

第七章 自分の人生に対する評価

7・1 自分の現状についての評価

「自分の現状についての評価」について、「総合評価」「達成感」「自己効力感」「幸福度」「将来展望」に関わるそれぞれ五つの項目から探ってみた。

まず、「総合的に見て、自分の現状に満足している」のは府中町 62.1%、三次市 59.0%。
「自分の現状に満足」しているのは多数派であると言える。ただし、様々な社会的属性の違いに沿って、その格差は大きい。重回帰分析で重要な変数とみなされるのは、第一に「父または母との同居」(-.199。ちなみにこの変数を除いて分析すると「配偶者の有無」が最も重要になる)である。父または母と「別居」している人は府中町 67.3%、三次市 66.6%と「自分の現状に満足」している人が多い。これに対して、父または母と「同居」している人は府中町 48.2%、三次市 44.2%と過半数が「自分の現状に満足」していない。これに関して、「親の援助が全くなくても、今の自分の生活が成り立つ」と考えていない人は、「現状評価」が低いという傾向も確認される ($r=.216$)。また、第二に、「職場関係の地域活動・社会活動」への参加度も重要である (.186)。これは、仕事満足度に関係する変数で、**仕事の満足度が自分の現状についての評価に繋がっていることとおおいに関係している**と考えられる ($r=.487$)。第三に、「世帯年収」(.170)。「世帯年収 400 万円未満」では、府中町 50.0%、三次市 50.6%と低い。第四に性別によって異なる「就労時間」の効果で、「**仕事为主**」の女性はそうでない女性よりも自分の現状評価が低い**が、男性の場合はその逆となる**。雇用形態では、「会社経営者・役員」の自己評価が高いのに対して (.094)、「(仕事も家事もしていない) 無業者」の自己評価が低い (-.078)。第五に、業種では、「建設作業」の自己評価が低い (-.089)。第六に低学歴層で自己評価が低い傾向があり、「専門学校卒」(-.106)や「高卒」のネガティブさが目立つ (-.080)。

次に「今までの人生を振り返って、達成感がある」のは府中町 44.9%、三次市 41.9%と半数を下回る。最も説明力のある要因は「個人年収」(.194)。職種では「建設作業」(-.108)、「サービス」(-.080)のネガティブな傾向が目立つ。また、「大卒または大学院卒」という学歴がある者に限れば、府中町 48.6%、三次市 55.1%と三次市のほうが達成感は高くなる (.133)。三次市のほうが「大卒」者が少なく、その学歴の効用が大きいとも言える。「配偶者」がいる者は「ライフステージ上の達成感」を得られるためか、値は高くなる (.085)。その他、男性のほうが人生における達成についてのプレッシャーが大きい**ためか、達成感**は**相対的に低い** (.114)。一方、女性について言うと、府中町の場合は「仕事以外が主」のほうが達成感のほうが高いが (51.2%>45.2%)、三次市のほうは「仕事为主」のほうが高い (45.4%<50.0%)。ここでも、三次市の女性のほうが仕事を継続することで、達成感を

得る傾向が強いことが示唆される。このほか、「職場参加の地域活動・社会活動」(.145)及び「趣味関係のグループの活動」(.130)への参加の程度に説明力がある。こうしたグループ活動への参加によって周囲から承認を得られる機会があり、それが達成感につながると考えられる。

「自分は人の役に立っていると思う」という項目で「自己効力感」の強さを探ってみたところ、府中町 46.7%、三次市 47.6%とそれほど高くはない。「達成感」に関する質問と回答傾向が似ており、最も説明力があるのは「個人年収」(.222)。「職場参加の地域活動・社会活動」(.164)、そして、「学校・保育所・幼稚園の保護者・同窓会の活動」(.124)、「ボランティア団体・消費者組織・NPO 等」(.118)への参加の程度にも説明力がある。また、業種では「医療・福祉」ではわりと高いが(.083)、「製造業」は比較的低い(-.081)。

「自分は幸せだと思う」のは、府中町 80.9%、三次市 81.5%と大多数を占める。最も強い説明力がある変数は、「配偶者の有無」(.259)。「配偶者なし」では、府中町 65.9%、三次市 70.2%にまで下がる。「年齢」の説明力もあるが(-.122)、「配偶者の有無」によって違う効果が出ている。「配偶者なし」の場合は府中町の女性で下落幅が大きく、20代で 73.0%なのが 30代で 50.0%に落ちる。その一方、「配偶者あり」の場合は男女とも年齢による影響はない。また、「職場参加の地域活動・社会活動」(.149)や「趣味関係のグループの活動」(.079)に参加度が高い人の幸福度も高い。一方、学歴が低め(「専門学校卒」-.107、「高卒」-.101)で比較的不ポジティブであるほか、職種で「建設作業」(-.093)、「サービス」(-.093)、業種で「製造業」(-.132)は幸福度が下がる。「家事も通学もしていない無業者」についてもネガティブである(-.077)。

また、「自分の将来に明るい希望を持っている」のは、府中町 55.9%、三次市 53.1%。過半数を少し超える程度であるが、必ずしも高い値とは言えない。そして、この項目は、前述の「幸福」に関する項目と回答傾向がとても似通っている。重回帰分析をすると、収入や雇用形態や職業に関する諸変数には、「家事も通学もしていない無業者」(-.075)にネガティブな傾向が目立っているほかは説明力がなく、最も重要なのは「配偶者の有無」であることがわかる(.246)。配偶者がいない場合、府中町 44.4%、三次市 41.0%と過半数を下回るのが、配偶者がある場合は府中町 62.1%、三次市 60.5%にまで上がる。この傾向に男女差はない。また、年齢は若いほうが肯定的で、20代では府中町 61.6%、三次市 54.1%なのに対して、30代は府中町 52.6%、三次市 52.9%と否定的な回答傾向が強まる(.178)。学歴も説明力があり、「高卒」(-.143)「専門学校」(-.114)で否定的な傾向が強まる。その一方、「趣味関係のグループ活動」(.100)や「職場参加としての地域活動・社会活動」(.082)への参加の度合いが強いと、ポジティブな回答傾向が強まる。

上記のいずれの項目についても「階層意識」の高さと相関があり、これらの項目でポジティブな回答をしている人は、他の各種満足度に関する項目でも現状肯定的である傾向がある。ただし、「世帯年収」や「個人年収」等の経済要因を示す変数との結びつきは、項目によって異なる。「自分の現状評価」は「世帯年収」が説明力を持ち、肯定的な回答のほう

が多数派である。一方、「人生の達成感」と「自己効力感」に関しては「個人年収」が説明力を持ち、多くの人が満足な個人年収を得られていない現状のなかでは、全体としては否定的な回答比率が高くなる。それらに対して、「幸福感」や「自分の将来展望の明るさ」は「個人年収」にも「世帯年収」にも有意な説明力がなく、「配偶者の有無」をはじめとする非経済的要因によって左右されるところが大きいと見られる。

7・2 交友関係についての現状評価

交友関係を評価するさいに、自分と近い仲間との「同質的結合」と、自分と異なる世界の人たちとの「異質的結合」とを区別して考えるべく、本調査でも別々に項目を立てて、その現状評価を尋ねてみた。

まず「自分と近い仲間たちと交流する機会に恵まれ、深い絆を築けていると思う」のは、府中町 59.8%、三次市 57.1%。地域間に有意差があり、三次市のほうが低い (-.085)。最も説明力があるのは「趣味関係のグループの活動」への参加である (.220)。「職場関係の地域活動・社会活動」への参加度もポジティブに作用する (.144)。一方、職業では「製造作業・機械操作」従事者は突出して否定的傾向が強い (-.175)。若いほうがポジティブで、20代は府中町 72.2%、三次市 69.8%と高いが、30代になると府中町 52.2%、三次市 56.2%と下がる (-.107)。また、雇用形態では「家事も通学もしていない無業者」の交友関係が乏しいようで、有意に低い(-.087)。

一方、「自分と異なる世界の人たちと出会う機会に恵まれ、視野を広げられていると思う」のは、府中町 35.7%、三次市 32.3%。「近い仲間たち」との交流に比べると、その比率はかなり低い。この項目についても地域間に有意差があり、三次市のほうが少ない (-.081)。重回帰分析では、「趣味関係のグループの活動」への参加の有意性が最も大きい (.213)。これに次ぐのが「ボランティア団体・消費者組織・NPO の活動」(.140)、そして「業界団体・同業者団体・労働組合の活動」(.129)である。このほか、「自営業主・家族従業員」はポジティブな傾向も強い (.111)。

この二項目の回答傾向の分析からは、二つのことに注目できる。第一に、グループ活動への参加度が交友関係の満足度に関与していることである。ただし、**グループ活動の種類によって交友関係の質が違えることが示唆される。「職場関係の地域活動・社会活動」が同質性結合に偏る傾向があるのに対して、「ボランティア団体・消費者組織・NPO 等の活動」は異質性結合に偏り、「趣味関係のグループの活動」はどちらのタイプの交友関係についても関わっている。**第二に、地域の交友関係について説明力があつた、地元出身者／地元外出身者の差異が見られないということである。地元外出身者は、地域のなかでリラックスできる人間関係がなくても、交友関係は地域外に広がっていて、総体としての交友関係の評価が低いわけではないということが理由として考えられる。

次に、意識調査項目について相関分析をし、上記の二つの項目の回答傾向の相違点を探ってみる。第一に、「自分と近い仲間たちとの交流」に満足感の高い人は、「余暇は家族とともに過ごしたい」と思い($r=.110$)、「親が要介護になったら、子どもが家で面倒をみるのは当然」と考えるなど ($r=.115$)、**家族で共有する時間を重視する傾向**が強い。「余暇は友人とともに過ごしたい」という傾向も強いが、これは「自分と異なる世界の人たちと出会う機会」に恵まれている人も同様である。また、「自分の利益と関係なく、自分の身内や仲間のためを考えて行動しようと思う」傾向も有意で ($r=.176$)、**家族に対する献身的な考えとの親和性**もうかがえる。「自分と異なる世界の人たちと出会う機会」に恵まれている人は、そのような傾向はない。第二に、「自分と近い仲間たちの交流」の満足度が高い人は「お互いに協調性があり、同じ目標に向かって一体感のある職場が理想」とする傾向や ($r=.127$)、「対立を好まず、「協調性」を大切にする日本的なやり方」を重視する傾向が強いが ($r=.116$)、「自分と異なる世界の人たちと出会う機会」に恵まれている人にはそのような傾向がない。**特に内集団との「協調性」を重視するか否かで、二つの項目は異なっている**。第三に、「自分と近い仲間たちとの交流」に満足している人は、「転職志向」が乏しい傾向があるが ($r=.135$)、「自分と異なる世界の人たちと出会う機会」に恵まれている人にはそのような傾向はない。「自分と近い仲間との交流」に満足しているゆえに、**転職志向が低くなる**ということも考えられる。

このような対人関係観の違いを念頭に置きつつ、二つの項目をクロス分析してみる。そうすると、最も多いのは「自分と近い仲間たちとの交流」にも「自分と異なる世界の人たちと出会う機会」のいずれにも満足していないタイプ（府中町 34.9%、三次市 36.7%）であり、双方の項目ともに満足しているタイプ（府中町 30.1%、三次市 25.9%）、「自分と近い仲間たちとの交流」には満足しているが「自分と異なる世界の人たちと出会う機会」が乏しいと感じているタイプ（府中町 29.3%、三次市 31.1%）とを合わせて、おおむね三分される。これは、前述の地域の交友関係について尋ねた項目と同様である。ただし、違うのは、地域の交友関係についてみられた「地元出身者」の優位性が、総合的な交友関係の評価についてはみられないということである。それどころか、三次市については、どちらの交友関係についても満足していない人が、「地元外出身者」では 29.4%であるのに対して、「地元出身者」では 36.7%と多くなっている。「地元出身者」でも「地元外で就学後 U ターン」した人については%と高いが、「ずっと地元」について限ると 51.9%とさらに多くなる。地域内の交友関係については、**地元在住者のほうがポジティブな傾向があるが、交友関係全体の評価ということになるとこの優位性は消える**ということが示唆される。地元外出身者は、地域外に交友関係のネットワークがあるため、かりに地域のなかに友人関係がなくても、友人関係に対する満足度がそれによって低くなるということはないのである。とくに三次市のばあい、「ずっと地元」に住んでいる人は、**地域にリラックスできる友人は多くても、総合的な交友関係の評価が低く、その傾向はかなり明瞭である**。

7・3 堅実志向

「今後の人生では、人並みに安定した暮らしを手に入れるため、現実的に考えて行動しようと思っている」のは府中町 82.6%、三次市 84.2%。大半がこの考え方に同意している。最も説明力があるのは年齢で、20 代（府中町 86.1%、三次市 86.0%）のほうが、30 代（府中町 80.9%、三次市 83.9%）より肯定的な度合いが強い（ $-.120$ ）。加齢要因からするならば、年齢が高いほうが「安定」を求めて「現実的」になることが想定されそうだが、逆の調査結果が出ている。そのことは、年代による違いがコーホート要因によるところが大きく、若い世代に「人並みに安定した暮らし」や「現実的に考えて行動」する志向性が強まっている可能性を示唆する。このほか、配偶者がいる場合は、この考え方に同意する傾向はさらに強まる（.086）。また、「高卒」（ $-.102$ ）や「自営業主・家族従業員」は否定的な傾向が強い（ $-.097$ ）。他の意識調査項目との関係では「将来の生活のことを計画的に考えて、お金をなるべく使いたくないと思っている」との相関が強く、特に**経済的な堅実さ**を意味していると考えられる（ $r=.124$ ）。

一方、「今後の人生では、平凡でもいいから、人並みの幸せを手に入れることが大事だと思っている」のは府中町 85.3%、三次市 87.6%。やはり圧倒的多数がこの考え方を支持している。「個人年収」による差異に説明力があるが、詳しく見ると「無業者」（専業主婦、学生等）と「有業者」との間の違いが大きい。無業者の場合は、府中町 89.8%、三次市 95.8%と比率はさらに高くなる（.235）。したがって、**女性の場合、専業主婦は「人並みの幸せ」を重視する傾向がとりわけ強いが、職業のある女性についてはそうした傾向は若干弱まる**。例えば、女性の割合が多い「飲食店宿泊サービス業」（ $-.121$ ）や「生活関連サービス業」（ $-.120$ ）では、むしろ比較的ネガティブな傾向がある。また、男性に多い職業でも、「建設作業」（ $-.105$ ）はネガティブな傾向が増える。「サービス」や「建設作業」は、金銭的余裕や時間的余裕がなく、生活に対する現状評価が突出して低い職種である。このほか、男性に限ると、「中卒」「高卒」で否定的な傾向が強まる。

「堅実志向」を示すこれらの項目については、他の項目と比べても圧倒的に多数の人が肯定している。「階層意識」や金銭的余裕とは関連しない。「人並み」や「平凡」という言葉は、人生目標としてはネガティブワードにもなり得るが、大半の人はそのように受け止めていない。階層格差とは関係なく、時代状況が「人並み」「平凡」を求めているのだと言える。

それでは、多数の支持を集めている「堅実志向」の考え方は、政治的な意味での「保守」につながり得るのであろうか。相関分析をすると、「人並みに安定した暮らし」を志向している人は、「総合的に見て、日本国内に外国人が増加するのは良いことだと思う」人は少ない傾向にある（ $-.098$ ）。**外国人の増加を社会経済的に不安視する考えは、堅実志向とゆるやかに結びついていることがうかがえる**。ただし、「堅実志向」を示す二項目とも「日本社会・

政治の現状満足度」とは相関していない。「日本の社会環境」についても、特に高い評価をしているわけではない。各種の満足度との関係についても、例えば「幸福度」「将来の希望」といった項目では、現状肯定傾向があるわけではない。「階層意識」の高さと結びついた、いわゆる「コンサマトリー志向」とは回答傾向が異なるのである。顕著であるのは「自分や家族のことが優先で、社会問題や政治について考える気にならない」とか、「自分の力は小さいので、社会問題や政治について不満を持っても仕方がないと思う」傾向の強さである（「人並みに安定した暮らし」との相関は、それぞれ $r=.113$ 、 $r=.098$ ）。その一方「社会問題や政治に関心があり、知識を得ようと心がけている」傾向が弱いわけではないので、社会や政治に無関心というわけではない。こうした結果からは、「堅実志向」の考え方を支持する人は社会や政治に様々な不満はあるけれども、目の前にある自分や家族の生活課題に向き合う「現実性」を優先するゆえに、それを言い控える傾向があるということが明らかにになる。

7・4 自己実現志向

「堅実志向」は多数派を占める。だが、それによって若い世代の人生観が全て説明できるわけではないだろう。「人並み」であることに飽き足らず、他者と異なる生き方をしたいと考えている人はどの程度いるのだろうか。

人生観に関する項目の回答傾向を分析すると、「今後の人生では、無理をしてでも、高い目標を立ててチャレンジしようと思っている」「今後の人生では、組織に縛られない自由な考え方を追求することが大事だと思っている」「今後の人生では、人とは異なる自分の個性を磨くことが大事だと思っている」の三つの質問は、回答傾向に共通性がある。この三項目で信頼性分析をするとクロンバックの α 係数は.615と比較的高い。そこで、この三項目のことを「自己実現志向」と呼んで議論をしたい。

まず、「今後の人生では、無理をしてでも、高い目標を立ててチャレンジしようと思っている」のは、府中町 41.7%、三次市 38.4%と半数を下回る。両自治体の地域差に説明力があり、三次市の方が「チャレンジ志向」を持つ人の割合が少ない（-.102）。ただし、年齢差は大きく、20代では府中町 49.0%、三次市 51.0%と約半数を占めるのが、30代では府中町 37.3%、三次市 31.5%とかなり減少することがわかる（-.149）。また、性別による違いも大きく、男性は府中町 52.7%、三次市 46.3%と半数前後であるのに対して、女性は府中町 35.3%、三次市 33.0%とかなり低くなる。男性のチャレンジ志向が強いことがわかる（-.140）。このほか、「職場参加の地域活動・社会活動」（.109）、「業界団体・同業者団体・労働組合」（.093）、「趣味関係のグループ」の活動（.086）といった各種のグループ活動への参加度にも説明力がある。そして、意識調査項目としては、「階層意識」と正の相関がありながら、生活満足度や地域満足度とは相関しないが、その他の各種の満足度の項目にお

いて、現状肯定的な傾向が見られる。特に現在の仕事については全般的に評価が高く、「今後の自分自身の仕事の将来について、明るい希望を持っている」傾向も強い ($r=.282$)。日本社会・政治の現状についても、比較的評価が高い ($r=.091$)。

次に「今後の人生では、組織に縛られない自由な考え方を追求することが大事だと思っている」のは、府中町 43.9%、三次市 49.6%。最も説明力のあるのは性別である。男性が府中町 53.3%、三次市 58.0%と過半数が肯定的であるのに対して、女性は府中町 38.3%、三次市 43.8%と否定的な回答のほうが多数派になる。**組織に所属していることの多い男性のほうが、女性よりも「組織に縛られない自由な考え方」を大事だと思っているという状況が示唆される** (.146)。組織に縛られている当事者であれば、かえって、組織からの自由を求める傾向があるというふうにも言えるだろう。また、年齢は若いほうが肯定的な傾向が強く、20代では府中町 50.7%、三次市 58.6%だが、30代では府中町 39.8%、三次市 44.0%に下がる (-.138)。ただし、若いといっても「学生(アルバイト収入あり)」(-.116)は突出してネガティブである。学生は他の20代と比べて、**比較的組織に従順な考え方をする傾向があるようだ**。おそらく就職という課題が念頭にあり、昨今の厳しい雇用情勢が他の属性よりもより強く意識されているからではないかと考えられる。女性のなかでは、「専業主婦」が比較的肯定的な傾向があるが (.105、府中町 40.5%、三次市 47.5%)、「家事が主の非正規雇用」の人はとても低い(府中町 32.2%、三次市 36.1%)。このほか、「ボランティア団体・消費者組織・NPO等の活動」への参加度にも説明力がある (.102)。興味深いのは、「世帯年収」は低いほうが肯定的であり (-.102)、「高卒」の肯定的な傾向も強いということである (.088)。**世帯年収や学歴が低いほうが、組織のなかでの自己実現よりも、「自由な考え方」に共感する傾向がある**ことが示唆される。そして、この項目は、「階層意識」による違いや経済格差とは関係しない。ただ、「生活満足度」については負の相関関係にあり ($r=-.089$)、転職志向が比較的強いことからすると ($r=-.117$)、現在の組織に不満でそこから抜け出したいという状況にある人がポジティブな回答をする傾向にあると考えられる。

「今後の人生では、人とは異なる自分の個性を磨くことが大事だと思っている」のは、府中町 53.1%、三次市 55.3%。上二つの項目とは違って、肯定的な回答のほうがやや多い。この項目についても、収入や「階層意識」、各種満足度は相関しない。最も説明力があるのは性別で (-.195)、男性は府中町 66.2%、三次市 60.7%であるのに対して、女性は府中町 45.5%、三次市 51.7%と半数前後にとどまる。また、年齢は20代(府中町 54.3%、三次市 64.9%)のほうが、30代(府中町 52.2%、三次市 50.0%)よりも「自分の個性」を重視する傾向が強い (-.105)。また、「ボランティア団体・消費者組織・NPO等の活動」への参加の度合が高ければ、個性重視志向は強まる (.148)。その一方、「学生(アルバイト収入あり)」は、むしろ個性重視傾向に対してネガティブな傾向が強い (.093)。業種では「公務員」が最も否定的である (-.075)。

以上、三つの「自己実現志向」に関する項目は、いずれも「堅実志向」に関わる項目と比較して、全体としては肯定的な回答比率が低い。とくに低調なのは、「30代」そして「女

性」である。「女性」のなかでも「家事が主の非正規雇用」である者については低い。「脱組織」志向や「個性」志向について言えば、「学生」も低い。こうした社会的属性の違いによる格差が何を意味するのかについては、さらなる考察が必要である。その一方、「20代」は「30代」よりも「堅実志向」が高いにもかかわらず、「自己実現志向」は比較的高いということに注目できる。経年変化についての検討は別に必要だが、少なくともこの点において、若者が保守的であるという言い方は適切ではない。むしろ、加齢によって「自己実現」願望が低下している／させられている傾向が顕著である。

7.5 利他志向／ソーシャル志向

最近の日本の若者研究では、利他的な動機に基づく「ソーシャル志向」の高まりに注目する議論が多い。だが、「ソーシャル」といっても、身内や仲間うちの関係性を重視する、「同質結合的」な側面と、広く社会に開かれた「異質結合的」な側面とが考えられる。本調査ではそれぞれのソーシャル志向について、別項目で尋ねている。

まず、「今後の人生では、自分の利益と関係なく、自分の身内や仲間のために考えて行動しようと思う」のは、府中町 59.2%、三次市 64.4%と多数派を占める。20代（府中町 63.5%、三次市 69.4%）が高く、30代（府中町 56.9%、三次市 63.3%）で低めであり、年齢が若いほうがポジティブである。また、家事時間が有意で（.077）、「家事が主」の人の場合、府中町 65.4%、三次市 70.4%と高率になる。職種では「建設作業」の低さが目立つ（-.119）。各種グループ活動の参加については、「政治団体の活動」への参加度を除けば（.090）、「自分の身内や仲間のために考えて行動しよう」という人が特に多いわけではない。意識調査項目との関係では、「階層意識」とは相関せず、日本社会・政治の満足度も高くないが、生活満足度や仕事満足度、そして自分の現状評価については高い。

一方、「今後の人生では、自分の利益と関係なく、広く社会に役立つ行動しようと思う」という項目については、肯定的回答は半数を下回る（府中町 40.1%、三次市 41.4%）。「自分の身内や仲間のために」とは対照的に少数派となる。だが、やはり年齢による違いに説明力があり、20代（府中町 47.0%、三次市 47.1%）は半数近くになるのに対して、30代（府中町 36.1%、三次市 38.7%）が4割を切って低めになる（.086）。一方、「職場参加の地域活動・社会活動」（.135）や「ボランティア団体・消費者組織・NPO等の活動」（.095）、「宗教団体の活動」（.091）への参加度が高まると、肯定的な回答傾向は強まる。

両項目とも、「階層意識」とは相関しないが、「広く社会に役立つ行動」への志向性のある人については「金銭的余裕」や「時間的余裕」があると考えた人が有意に多く、各種満足度に関する項目についても現状肯定傾向が強い。「社会問題や政治に関心があり、知識を得ようと心がけている」など、社会や政治に対する関心も顕著に高い（ $r=.219$ ）。一方、「自分の身内や仲間」への志向性の高さは経済的要因とは関係しないと見られる。「自分の身内

や仲間」への志向性が強まれば、生活満足度や仕事の満足度は高くなるが、社会や政治の満足度は高くなく、関心も高いとは言えない。「地域定住意向」が強く ($r=.092$)、「平凡でもいいから、人並みの幸せを手に入れることが大事」と考える傾向が有意に高い ($r=.115$) という点も、「広く社会に役立つ行動」への志向性とは異なる。その一方、社会の変化に対する不安には敏感で、例えば「将来、日本が戦争に参加して、自分が巻き込まれる可能性」について憂慮する傾向が有意に高い ($r = -.108$)。

「自分の身内や仲間」を重視する傾向は「広く社会に役立つ」ことを重視している人より多いと言えるが、二つの項目をクロスさせてみると、第一に両項目ともネガティブな人（府中町 34.6%、三次市 31.2%）、第二に両項目ともポジティブな人（府中町 35.5%、三次市 37.1%）、第三に「自分の身内や仲間のため」はポジティブだが「広く社会に役立つ」のはネガティブな人（府中町 24.8%、三次市 26.5%）とおおむね三分される。両方ともネガティブな人は「30代」に多く、両方ともポジティブな人は「20代」に多い。そして、「自分の身内や仲間のため」はポジティブだが「広く社会に役立つ」のはネガティブな人たちは家事時間の長い「主婦」に多い。

「自分の身内や仲間のため」にしろ、「広く社会に役立つ」ためにしろ、20代のほうが30代より「自分の利益と関係なく」行動することが大事と考える傾向が強い。だが、これが世代の特徴であるのか、あるいは加齢にともなって減退していくのかは、今後検証していく必要がある。

